

陰謀論(2)

「人に優しい」陰謀論

関西大学総合情報学部

植原 亮

陰謀論の前近代性

前回はSNSを通じて広まる陰謀論への対処をめぐる議論を取り上げた。しかし、SNSの影響はあるにせよ、そもそも人はなぜ陰謀論などというものに惹かれるのだろうか。九・一一同時多発テロは、実は戦争の口実を欲していた米政府による内部犯行だった——こうした陰謀論は荒唐無稽であるにもかかわらず、少なくとも信者を獲得している。陰謀論に魅力を感じて受け入れてしまいかねない働きが人間の認識には備わっているようだ。

哲学では伝統的に認識や知性を主題としてきたこともあって、陰謀論は現代の哲学でも熱心に論じられている。その出発点に位置するのが、二十世紀に活躍した科学哲学者のポパーである¹。社会科学の課題や目標についての論考の中でポパーは、彼が「社会の陰謀理論」と呼ぶ見解を取り上げている。社会の陰謀理論とは、戦争や大不況を含め、社会で生じるあらゆる出来事を、一部の人々の計画によるものとして捉える見方のことだ。ヒトラーも信じていたシオン議定書にもとづくユ

ダヤ陰謀論はその一例である。ポパーによれば、こうした社会の陰謀理論は有神論的な世界観が姿を変えたものだという。ホメロスの『イリアス』で描かれるトロイ戦争はゼウスの企みによって——増えすぎた人口を減らすべく——引き起こされており、英雄たちは神々の操り人形でしかない。意志や気まぐれにより万事を支配するこうした神々を捨て、代わりに悪意のある人間を黒幕として据え直したのが、社会の陰謀理論にほかならない。だが、現実の社会は、そうした陰謀論の筋書きとは違って、むしろ元々の計画から逸脱した意図せざる結果から成り立つものであり、そしてその点の解明こそが社会科学の課題だ、というのがポパーの主張である。

ある種の素朴な世界観が陰謀論の根底にあるというのはその通りだろう。哲学者のカサムは最近の著作で、陰謀論を以下のような意味での前近代性によって特徴づけているが²、そこにも有神論との同型性を見てとるポパーの主張との類似性が見受けられる。この世界で生じる複雑な出来事は少数の人間たちが秘密裏に活動することで制御されており、それゆえ物事は常にしかるべき理由が

一発の銃弾だけでケネディと知事の二人を殺傷することはできないし、飛行機が衝突したくらいで世界貿易センタービルがあんなふう崩壊することはありえない(だから政府の手であらかじめ爆薬が仕掛けられていた)。そう、物事の真相は見た目とも世間でいわれていることとも違う——こうした考えから陰謀論は出発する。第三に、陰謀論は秘教的な色彩を帯びている。「真相」をめぐる思弁が想像力を暴走させ、陰謀論の筋書きは奇怪さの度合いを深めていく。だが、そこに宿る、他人は知らない事実を自分は知っているという秘教性が、一部の人たちにとってたまらない魅力となる。第四の特徴はアマチュア性である。JFKや九・一一についての陰謀論者は、あんなことは誰かが裏で仕組んでいなければ起こりようがなかったと主張するけれども、彼らはいよいよ、銃や狙撃、あるいは航空機やビルの構造についての専門家ではない。

陰謀論は「人に優しい」

こうした特徴の中でも前近代性とアマチュア性は、陰謀論が我々の自然な認識にマッチしやすいこと、いわば「人に優しい」ことを示唆しているように思われる。まず、社会的な動物である人間は、他者の意図や行為の意味を自ずと推察する能力——「心の理論」や「素朴心理学」と呼ばれる——を高度に発達させている。しかし、そうした能力に長けているだけに、様々な要素が複雑に絡み合っ生じ、そのせいで本当は容易な理解を許さない出来事であっても、「それは全部、奴らの意図や計画通り」式の単純なお話を受け入れ

やすい。得意の心の理論を働かせるだけで済むから実に楽だ。それに、複雑な出来事をきちんと検討するうえで欠かせない専門的(多くは科学的)な知識は直観に反することも多いため、簡単には身につけられず、ときに厳しい訓練を要する。できればそんな「人に優しいくない」ことは避けて、自然で素朴な認識を保ったままでいられるならそれに越したことはない。だがそこに陰謀論のつけ入る余地が出てくる。

知のネットワークに依存する我々の知識

さらに「説明の深度の錯覚」として知られる現象³もここには関与しているらしい。この現象の説明によく引き合いに出されるのが水洗トイレの例である。毎日使うものだからその仕組みも熟知していると思いがちだが、それは錯覚にすぎず、水を流したあとに再び水が貯えられる原理をいざ説明するようにいわれても、普通の人は困ってしまうだろう。深い説明が本当はできないようなことでも、しばしば我々はよく理解しているつもりになってるのである。

こうした錯覚が起こるのは、物事に関する自分の理解や知識が、実際には専門家を含む集団的な知のネットワークに強く依存しているにもかかわらず、そのことを認識するのが難しいからだとされる。自分が属すネットワーク内の他の誰かが詳しく知っているということと、自分が知っているということとの区別がきちんとできていないのだ。このことが結果的に、自分の知性や理解力を実際よりも高く見積もり、ひいてはアマチュアでしか

あって生じている。出来事の意味は、まさにその理由に存する。したがって、例えばケネディ暗殺という途方もない出来事は、それ相応の理由があって生じたと考えねばならない。オズワルドという一介の青年がたまたま首尾よく独力で大統領を射殺してのけたのではなく、背後に国家規模の邪悪な陰謀があったであろう釣り合うような、それだけ深く大きな意味のある事件だったはずなのである。あれほどの犠牲者を出した九・一一もまた、強大な黒幕の意志が働いたのでなければ、それに見合うような意味をなさないではないか——実際には取り立てて深い意味などなくても重大な出来事は起こりうるのだけれども。

陰謀論の特徴

カサムは他にも陰謀論の特徴を挙げている。第一に思弁性である。えてして陰謀論者には自説を支える証拠が乏しいので、周辺のな事象や奇妙な手がかりに焦点を当てて考察を進めざるをえない。結果、推測で点と点を結びつけたような思弁的な説をこしらえることになる。第二に、当然ながら陰謀論は通説や公式見解に異議を申し立てるものである。

ないので専門家を上回る説を考え出せると思ってしまう知的な自信過剰の傾向を生む。そこから条件次第で——例えば専門家も知らない世界の真実に触れているといった秘教性加わるなどして——陰謀論が育ってくるわけ⁴。

先述のポパーは疑似科学の批判者としてよく知られているが、疑似科学もまた「人に優しい」といわれる⁵。疑似科学が多くの人に受け入れてもらえるように進化し続けていること⁶を考えると、同様に陰謀論も今後いつそう進化していくに違いない。それに対抗するためには、自分の知識や理解力が集団的な知のネットワークに支えられていることや、真つ当な科学や学問がときに「人に厳しい」といったことを正しく認識すること、すなわち認識や知性そのものに関するメタ的な認識——認識論や科学哲学と呼んでもよい——を養うことが、有効な手立てのひとつとなるのではないだろうか。

△注▽

- 1 カール・R・ポパー『推測と反駁——科学的知識の発展』、法政大学出版局、一九八〇年
- 2 Cassam, Q. *Conspiracy Theories*. Polity Press, 2019
- 3 スティーブン・スローマン&フィリップ・フアンバック『知ってるつもり——無知の科学』早川書房、二〇一八年
- 4 Levy, N. *Radically socialized knowledge and conspiracy theories*. *Episteme*, 4, 2007
- 5 菊池聡『なぜ疑似科学を信じるのか——思い込みが生みだすニセの科学』、化学同人、二〇一二年
- 6 Blanke, S. et al. *Why do irrational beliefs mimic science? The cultural evolution of pseudoscience*. *Theoria*, 83, 2017